

\*\*\* 記事 \*\*\*

例会記録

七月例会 休会

八月例会 休会

九月例会 (神奈川県会と合同) 平成十一年九月二十五日

横浜市健康福祉総合センター八階大会議室

一、梅毒の薰蒸療法について

中西 淳朗

一、佐藤方定の発見した『大同類聚方(延喜本 寮本)』

後藤 志朗

一、記憶のメカニズムの歴史的考察

鈴木 衛

一、ペスト残影シリーズ(上)

ケルンに『ペスト残影を求めて、その二』

滝上 正

一、女性の病の社会史

野末 悦子

十月例会 平成十一年十月二十三日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、検梅医・松山不苦庵の足跡

中西 淳朗

一、ドイツ自然研究者および医師協会の一七五五年(二)

―専門・分科化とアマルガメーションの二十世紀―

小原 正明

十一月例会 休会

十二月例会 (日本薬史学会・日本獣医史学会と合同) 平成十一年十二月十八日

順天堂大学医学部九号館三番教室

一、W.ハーヴィイのアナトミアと方法

月澤美代子

一、動物の死と記念物

勝山 脩

一、日本の犬塚―動物愛護史の視点から

小佐々 学

一、横須賀製鉄所医師P. A. L. サヴァアチェをめぐる

竹中 祐典

例会抄録

黒船来航と蘭医たち

望月 洋子

仙台藩の蘭医工藤平助が「赤蝦夷風説考」を著して、老中田沼意次に建白を行い(一七八三)、この献策が容れられ、普請役らがエトロフへ派遣された(「蝦夷地一件」)。異例ともいえる献策採用から対ロシア政策に難渋している施政者の困惑ぶりがかがえる。

海外通の前野良沢・中川淳庵・桂川甫周・大槻玄沢らと親交のあった工藤は、カムチャツカ・エトロフの状況を述べ、

ロシアと平和裡に貿易を行うべきとの意見を主張した。幕府の海外情報収集は遅れ、対策は皆無であつたから、鎖国下の日本で、外国語が読めて、海外事情を知る有識者を起用することを先ず考えたのは無理ではなかつた。

蘭学者・蘭医・通辞は一つに括られがちであるが、情報の伝播、科学知識、技術習得などの点からも、また諸藩の社会的階層事情からも、蘭医を起用するのが直截かつ無難であつた。田沼時代という背景もあり、杉田玄白・大槻玄沢らは北辺の国際事情について発言摘録した。ロシアに漂着した漂流民から聴書を取り、書物としてまとめたのも蘭医たちである。年を追つて露英の黒船が来航しトラブルが頻発、国家の危機意識が高まるにつれ、蘭学者・蘭医たちは北へ南へと移動して情報を摂取し、知識を集めた。藩や地方差を超越して交流し得た時代である。彼らは徳丸ヶ原の演習を見、佐久間象山や江川英龍の塾、さらに伊東玄朴や緒方洪庵の門を叩き、意見を交すことができた。一冊の洋書を貸借書写し、共訳もしている。翻訳兵書については所荘吉氏の目録が詳しい。大槻玄沢が蝦夷御用を、箕作阮甫が長崎出張を命じられてロシア船御用をつとめ、伊東玄朴が佐賀藩命で砲台築造に関与するなど、医師たちは軍事に多忙となつていく。

南部藩医大島高任は長崎で修行中、藩から医学を中止して砲学を修めよと命じられ、V. Hugenin の鉄製砲鑄造法を訳す。水戸藩の藤田東湖は、大島を招聘して反射炉を造らせるべく奔走、三春藩の蘭医熊田嘉門と共に強引にスカウトした

塾中ぶりを示す書簡が大島家に残っている。佐賀の佐野常民も医学修行をやめて精練方に配属された一人である。佐賀藩の軍事科学については「松の落葉」に詳細に示されている。医家にとつて、外国船の来航は疫病の流入をも意味した。

中国との接触が痘瘡をもたらして以来流行はくり返しており、嘉永二年に長崎の蘭館医モーニケがジャワから牛痘を持ち参して、種痘を実施したことで蘭医たちは痘瘡の予防にとりくむ。この長崎経由の牛痘とは別に、ロシアに抑留された中川五郎治がロシアで得た種痘の知識は、通詞馬場貞由により「遁花秘訣」として紹介された。彼は英船からも知識を得ている。長崎の痘苗を普及定着するため努力した蘭医たちは、積極的に藩主に働きかけ、自らの家族に率先して種痘した。種痘が成功を見ることで、合理的な予防医学を認識し、自然科学の偉力を広める気運が生じた。洋医学への信頼が根つき、漢方医に対抗する社会的背景を強化したことで、種痘をめぐる蘭医たちの協力は無視できない。長崎の痘苗は檜林宗建、鍋島直正、大石良英、大槻俊齊、日野鼎哉・笠原良策・松平春嶽・緒方洪庵・半井元冲らをはじめ多くの協力によつて普及し、各地に除痘館の設立を見るまでに至つた。

深瀬泰旦氏の研究で知られた手塚良斎も、長崎から痘苗を東へ運ぶ役割を依頼されていたことが、笠原書簡に見えてくる。嘉永二年当時の良斎が、藩主の命により長崎で砲術書を購入し、医学書、砲術書を訳していた事実も示されている。ラディカルな蘭医だつた橋本左内も、福井藩医の父彦也や

笠原良策とともに種痘普及や洋書習学所設立に力を注いだ。階級の別なく人材を抜擢し封建の主従関係を超えて、国家の統一を夢みた英才である。昭和の戦争により憂国の志士像に作り上げた観がある。

蘭医たちの行動は多岐にわたっていて個々の紹介は割愛せざるを得ないが、主命により医学を軍事的知識の摂取に変更した者も、種痘などには協力を惜しまなかった。従来、蘭医は地方単位で調査されがちだったが、外国の脅威を前にして或は複数の塾に在籍し、藩を超えて協力しつつ多角的に活躍する姿が見られる。その努力が近代的医学の使命を自覚し、学術的組織化の要請を生んだとも見られる。

こうして諸藩、とりわけ海を領内に抱えた藩では必死の防備と砲台築造、反射炉の研究が続き、阿蘭陀別段風説書に予告された通り、嘉永六年アメリカによる黒船、マシユ・カルプレイズ・ペリーの来航を迎えるのである。蘭医たちの行動について、さらに広範囲の調査を今後の課題としたい。

(平成十一年六月例会)

\*\*\*\*\* 紹介 \*\*\*\*\*

### 『大塚恭男論文集 東洋医学の世界』

日本医史学会における東洋医学に関する演題はこの半世紀

の間に年々増加している。かつては東洋医学を蔑視する傾向が強かったが、著者大塚恭男先生の門下の小曾戸洋博士らによる本格的な発表が現われ、可成り様子が変わってきた。しかし東洋医学や漢方に興味や関心を持つ医史学研究者も、未だ異和感があり当惑しているのが現状であろう。そういう方に推奨できるのも、本書の特徴である。私は学生時代から東洋医学と医史学を並行して勉強してきたが、その間にあって、変な言い方だが、私の性に最も合ったのは大塚恭男先生の諸論考であった。なぜか。それは東洋医学という特殊な世界に閉じ籠らず、広く東西にわたる世界的な視野と臨床医史学的な展望が気に入ったのである。従って大塚恭男先生の論著は特に心して集め、読んできたつもりであった。ところが本書を開いて驚いた。私の知らない論著が相当あり、改めて啓発されることが多く、編集の労をとられた花輪・小曾戸両先生らに感謝せざるを得なかった。また、大塚先生と言えば先考の敬節先生が余りにも有名で、やゝもすると恭男先生は親の七光りと思われがちだが、本書によって、出藍の譽であることを知ることができた。

広汎な内容を五章に分けてあるが、細目をキーワードで示そう。第一章 東洋医学について——東洋医学の歴史・中国医学の伝統・古代アジャ医学・佐々木隆興・朝比奈泰彦・生命概念・医の倫理・瘀血の証・氣・水・ワルテンシュタイン城。第二章 医史学的考察——傷寒論・千金方・吉益東洞・吉益南涯・医者意也・『東洋洛語』・大槻玄沢の学風(処女作、